

土木会通信

第1号 平成19年11月1日

土木会通信の開設にあたって 近畿大学土木会会長 泉 導秀(昭和39年卒業)

近畿大学土木会の皆様、現役バリバリの社会人の皆様、そして、毎日を勉強や実験、青春に明け暮れている学生諸君、静かに歴史を刻んで来た近畿大学土木会が、昨年のホームページ開設に続き、今度、土木会通信を開設することになりました。昨今個人情報保護法令の名の下、何かと社会的に異質な情報機能の中、真にお互いに役立つ、そして、求め合って役立つ土木愛の情報通信として、広く土木会の活動や先生方の活動を見ていただき、お互いに力になれ、心の糧になればと願っております。

社会環境工学科の近況

学科長 柳下 文夫 教授

近況報告の定番は“教育を中心とした学科の動向”“教員の人事変遷”“学生の進路決定状況”等ですが、今春4月に定年退職されました谷平先生および前就職担当の佐野先生が多くを詳しく報告されますので簡単に学科の動向を中心にお知らせ致します。先ず、皆様ご存知のことと思いますが、平成14年の学部改組に伴い土木工学科は社会環境工学科に学科名が変わり、従来の土木工学に環境分野(人間環境から地球環境まで)を加え、社会のニーズに応えるべく新たなスタートを切りました。また、平成15年には日本技術者教育認定機構(JABEE)より私立大学の土木・建築系学科では最初の5年認定を受けました。今後、更なる教育改革を進め、あわせて研究面での充実を図ってまいります。

大学全体の変容についてお知らせ致します。少子化時代において受験生に選ばれる大学を目指し、教育を重視する諸策を打ち出すことはもとより、施設・設備の充実にも力を注いでおります。旧校舎が建て替え時期に入っていることありますが、校舎・通路・教室内設備が10年前とは見違える状況にあります。とにもかくにもキャンパス全体が美しくなっています。一度ご来学の上、母校の変容をご確認されたいかがでしょうか。

最後に、建設業界を含め社会全体が変革を求められる昨今、同窓各位には、社会環境工学科の発展のため今後より一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のご活躍を祈念いたします。

近畿大学 33 年の思い出(その1)

谷平 勉 (教授 平成19年3月退職)

この春66歳定年制になったのを機に33年間お世話になった近畿大学を退職することになった。数字では人生の半分ではあるが、我が奉職生活の大半を近畿大学のキャンパスで過ごした。今2007年6月、退職3ヶ月たって少し落ち着き始めたこの機会に、この33年を振り返ってみたい。今手元に昭和45年から平成9年までの我が土木工学科に着任、昇任、退職した方々の一覧表がある。昭和49年谷平講師着任とある。そのときの教員は川上謙太郎教授、伊藤剛教授、水野俊一教授、星治雄教授、以下十数名であった。学科の一員としての最初の仕事が目黒雄平教授の葬儀参列であった。右も左も分からないでただ行けといわれていったような印象だった。目黒雄平という人は鴨緑江ダムに関わられた方だということは耳にしていた。今ウェブで調べてみると、《特集】電業より見た支那水力資源の開発 目黒雄平 (電気庁水力課技師)1940》という一行が見つかった。

一年経って古川一郎講師が退職された。橋梁工学が専門だとか。このころ母校の我が師倉田宗章教授が退職間際で、それまでに学位を取らねばということで論文作成に没頭していたため、他を見る余裕が全くなく、古川先生とも親しく接する機会を失ってしまった。

その一年後に川上先生が退職された。その頃まだ定年制がはっきりしていず、80近くの豊饒(かゆ)とした気むずかしい先生という印象だった。親しく言葉を交わす機会もなく、退職後1年そこそこで突然の安楽死だったと聞いた。人生のすべてを教職に尽くし大往生するということは、とうてい自分ごときには及ばないと思ったことが今でもはっきり覚えている。(次回につづく)

コンクリートカヌー競技大会 3位入賞 初出場にして快挙！

コンクリート系材料を使用して製作したカヌーで競漕やアイデアなどを競う「コンクリートカヌー競技大会」が平成19年8月25日に兵庫運河（神戸市）にて開催されました。近畿大学理工学部社会環境工学科の学生が中心となり製作した「World II号」（カヌー名称）が競漕の部3位、ポスターセッションの部3位、総合の部3位の快挙を果たしました。この大会は、(社)土木学会関西支部創立80周年記念事業の一環として、(社)土木学会関西支部・近畿高校土木会が主催し、高等学校、工業高等専門学校、大学、一般から41艇が参加しました。

カヌーの形状や材料は、スピード、直進性、軽量化を重視して検討がなされました。

モルタルには建設資源有効利用の観点からアスファルト舗装発生材からリサイクルされた細骨材を使用。計画から完成まで約3ヶ月間を費やして、高靱性モルタルによる長さ4m、重さ70kg、厚さ10mm以下のカヌーが完成しました。カヌーには近畿大学をイメージした銀杏の葉やレンガ造りの西門をあしらいました。

最後に、大会参加にあたりご支援を賜りました、近畿大学理工学部、近畿大学土木会、梅土会、八嶋奨学金制度に厚く御礼申し上げます。



私が近畿大学で学んだこと 池本 佳代 (平成18年卒業) 神戸大学大学院 自然科学研究科 建設学専攻

私は、平成17年度に近畿大学社会環境工学科を卒業し、神戸大学大学院へ進学しました。現在、神戸大学大学院でコンクリート構造物の維持管理の研究を行っています。私が維持管理の研究をしたいと思うようになったのは、学部3年生の時に行った阪神高速道路株式会社(旧阪神高速道路公団)へのインターンシップが大きなきっかけとなっています。もともと構造物の維持管理について興味があり、また、実際の現場を見ることが好きだったこともあり、その両方を経験できるインターンシップは私にとって大きな刺激になりました。学校で勉強したことが実際の現場でどう活かされているのか、また、教科書と違うことが現場で起きているのかなど、授業だけではわからないことを数多く経験することが出来たと思います。このインターンシップを通し、維持管理についてより深く研究したいと思う気持ちが強くなると同時に、様々な人と接することで、自らの社会観や大学生活における目標を明確に持つことが出来ました。

近畿大学在籍中は、柳下先生の研究室に所属し、陸の孤島である34号館(実験棟)で毎日13人の仲間とつながりを持って朝から晩まで供試体作成を行っていました。その当時、研究室に院生がらず学部生だけだったので、簡単な作業でも時間がかかったり、目の前の作業にしか注意が行かず全体のことが把握出来なかったりなど、先生には大変ご迷惑をおかけしました。この卒業研究を通して、仲間と協力して一つのことをやり遂げることの難しさや、物事の全体を把握することの重要性を学びました。また、学部4年間においては、友達や先生方から多くのことを学び、これらの経験が今の私にとって大きな自信となり、現在の大学院生活において大いに役立っていると感じています。

現在の大学では、供用中のコンクリート橋梁に対して点検を行い、得られたデータや初期条件、材料特性などを基に劣化予測を行った後、外ケーブル工法を用いた補強を行った場合の安全性評価を行っています。実橋梁を扱っていることもあり、より現場に即した維持管理の勉強ができる環境であるのと同時に、院生として任される部分が多く、責任も一層大きくなったと実感しています。大学院の生活は時間的な拘束が学部比べて多くなりましたが、時間を自分自身でうまく管理することで、研究やアルバイト、趣味の旅行に行くなど、毎日がとても充実しています。また、他大学の大学院に行ったことにより、近畿大学の良さも再発見できるなど、いい意味で自分の幅が広がった気がします。

大学は学部卒でも4年間、院卒でも6年間と、人生の中で考えるとたった数年でしかありません。しかし、この数年は自分自身が進みたい進路を考え、それに向かってチャレンジできる大切な数年だと思います。私はそれを様々な人との出会いや経験を通して紆余曲折しながらも見つけることができました。私がそう思えるようになったのも、ご指導して下さった先生方や友達、家族のお陰だと思っています。本当に感謝しています。ありがとうございました。

ご承知のとおり、本学の土木工学科は長い歴史を経てこれまでに 6000 名に及ぶ卒業生を輩出してきましたが、平成 14 年度入学生からは社会環境工学科に改称して歩み始めました。新学科では建設設計コ - スと環境計画コ - スが設けられ、新カリキュラムのもとで学んだ学生諸君は平成 18 年 3 月に社会環境工学科の第 1 期生として社会へ巣立ち、現在は第 3 期生となる学生諸君が就職活動に奮戦しています。そこで、社会環境工学科で学ぶ学生諸君の就職活動状況について述べてみます。

まず、新学科への名称移行と同時に学生諸君の建設系に対する意識的変革が加わり、さらに昨今の建設業に対する社会的風評も重なって、土木工学科時代に就職希望として人気の高かった建設系や公務員など土木工学分野から建築系、環境系、情報系への進路を選択する学生が多くなっています。社会環境工学科の建設設計コ - ス・環境計画コ - スの卒業生についてコ - ス別就職先の分類を図 - 1 に示しましたが、この図からも学生諸君それぞれが在学中に選択した各々のコ - スで学んだ知識を生かす就職先を選別しているといえます。また、全学生の進路分布を図 - 2 に示しましたがこの図からも明らかのように従来の土木系に変わって建築系や環境系、また時代を反映した IT 産業系を含んだ進路が大きく増加傾向にあるといえます。新学科での概略的な進路に対する学生数は表 - 1 の傾向であり、就職希望者の大半が建設業関係であった従来の土木工学科卒業生に比較するとその就職先は大きく変貌する兆しを見せています。この要因の中には多様化する情報化時代の中で魅力的と思える職業分野が急増する影響を垣間見ることができ、学生諸君の職業観が大きく変化してきていることを意味しているといえます。この職業選択の動向は本学科に限った傾向ではなく全国的に共通しています。したがって、建設技術者への就職は大きな門戸が開いているといえます。

本来、土木工学・建設技術者の役割は社会基盤を構築し、より豊かな社会を持続する上で計り知れない重要な職業であるといえ、若者が魅力ある建設業と思える職場づくりや「ものづくり職業」の楽しさ・重要性を社会全体で推進する必要が迫っているといえます。

就職活動そのものも新しい時代の情報化就職体制に大きく変貌してきています。就職ナビや企業ホームページからの就職情報に基づいた応募体制のもとで今年もすでに多くの学生諸君が内定しています。公務員の採用も増加傾向にあります。それぞれの学生諸君が建設系、環境系、建築系などそれぞれの意に叶った就職先を決定して、貴重な技術者としてその力を存分に発揮して活躍してくれることを切望してやみません。

就職先の分布
(外:建設設計、内:環境計画)

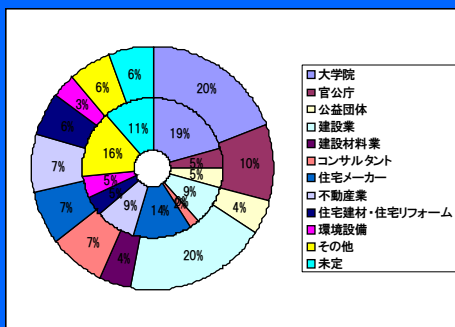


図-1 社会環境工学科全学生の就職先

2006年3月卒業生
就職・進路状況

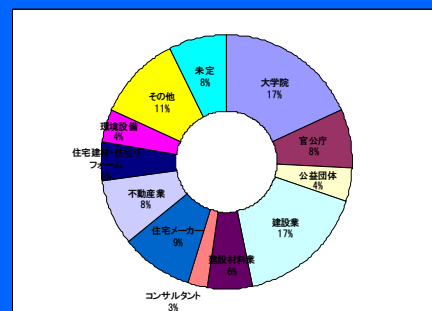


図-2 コース別の就職先の分布

就職先の分類

- 進学: 15~20名
- 公務員: 10~15名
- ハウス系: 20~30名
- 建設系: 20~30名
- 鉄道・道路・橋梁など: 5~10名
- 金融・JA・他企業: 5~10名
- 教職・留学・非就職: 3~5名

表-1 就職希望先の学生数

編集後記:平成 5 年まで発行されておりました土木会通信を今回新たにホームページ上で発信することになりました。今後年 2 回位のペースで発信できればと考えております。

よろしく願い申し上げます。

近畿大学土木会